

高山の歴史～徳川幕府の時代

江戸時代（1603-1867）に、江戸幕府によって全国が統治されていた頃、高山は交通の要所であった。高山は物資や人を運ぶため中央で管理された5つの街道が交差する場所にあり、宮川に面していることから、木材を富山に運び、そこから日本各地に運ばれた。高山は豊かな鉱山と緑豊かな森林に恵まれていたため、特に貴重な存在であった。

1692年、幕府は支配者である金森家を別の藩に移し、道路や水路の支配権を確保するために、この地域を直接管理するようになった。高山城は解体され、武家は移転させられた。

飛騨国の大工や木彫家は、江戸時代に空前の反映を遂げた。彼らはすでに「飛騨の匠」（文字通り、飛騨の匠の大工）として全国的に知られており、奈良や京都の壮大な寺社を造っていた。また、徳川政権下の長い平和な時代が続くと、有力な武士の家を建てたり、精巧な根付などを販売したりしていた。

また高山には50軒以上の酒造免許を持つ蔵元や、多くの絹織物業者、金貸しなどがいた。このように文化の中心地として繁栄した高山は、「小京都」と呼ばれるようになり、この通称は今でも使われている。